

ボランティア・市民活動センターに向けて

今後のボランティアセンターの機能として、ボランティア活動だけでなく、NPOを含めた市民活動や当事者活動などとの協働・支援が期待されています。全国の市区町村社協・ボランティアセンターの中には、市民の主体的な力量形成、身近で楽しく力強い活動とイメ

ジづくり、協働推進のためのルールと仕組みづくり、社会貢献マーケットの形成に向けた支援が進められています。そこで今回の特集は、こうしたボランティア・市民活動センターへのさらなる充実をめざして、様々な事業に取り組んでいる事例を紹介し、協働に向けた支援のポイントや期待される効果についてまとめてみます。

地域と家庭と学校が協働で、子どもたちの休日をサポート

徳島県・海南町社会福祉協議会 海南町ボランティアセンター

地域が一体となって子どもたちをサポート

徳島県の南部に位置する海南町は、約6,000人の人々が住む自然豊かな町である。しかし最近では、かつてのような外遊びをする子どもたちの姿を見かけることが少なくなる中、「学校週5日制」が実施され、子どもたちの休日の過ごし方が問題となってきた。

一方、地域には児童館や学童保育施設などの整備が不十分であることから、子どもたちの「体験の場」をつくることも、地域が一体となって活動を展開することで、豊かなまちづくりへとつながっていくこと、「海南まちぐるみで子どもサポート事業」への取り組みが始まった。

体験の場「びっくり箱」の誕生

事業を進めるにあたって、V活動団体を核として委員会を結成し、地域課題の整理や役割について検討を重ねた。また、学校や家庭、地域住民にも働きかけながら、具体的な活動へと進めていった。

事業スタートから約半年を経て、子どもたちが「ものを作る」「校区や世代・障害の枠を超えて、人とふれあう」「地域や季節を知る」ことの喜びを実感する場「びっくり箱」が誕生した。

ここでは、その経緯と協働への取り組みを時系列で紹介する。



地域と家庭と学校の連携の強化をめざして

海南町社会福祉協議会 海南町ボランティアセンター 地域福祉活動コーディネーター 前野洋子さん

「びっくり箱」への取り組みは、多くの住民の協力により、これまで5回実施することができました。最近では、子どもたちから「今日はびっくり箱やってますか?」と問い合わせがくるなど、昔の遊びやこの世に一つしかないものを作り出す体験、昔のような地域の人たちとのふれあいなど、子どもたちにとっては新鮮な空間になっていることと思います。

また、保護者からは「近所のお兄さん・お姉さんたちと、夜遅くまで遊んでいた幼い頃を思い出した」「休日に子どもとふれあうゆとりがない中で、楽しく休日を過ごす機会ができた」など、継続した活動を望む声が寄せられています。

今後は、地域のあらゆるところで小さな「びっくり箱」が開催されることをめざす一方で、児童・青少年を支援する会のメンバーに、中学生や高校生に参加してもらえるよう働きかけていく予定です。地域の大人は「ゆとり」の時間が少ないのが実情ではありますが、社協としては、「総合的な学習の時間」のプログラムづくりを学校と共に考えていく機会をつくり、地域と家庭と学校の連携をより強固なものにしていきたいと考えています。



色紙を使ってコマづくりに挑戦!

平成14年	内容	協働体制
6/14 (金)	第1回「海南っ子集まれ!」子育てを考える会(以下、子育てを考える会)を実施 (1)会のねらいについて確認し合う (2)地域から見た海南町の現状を出し合う (3)どんな取り組みにしたいかを検討	住民参加V活動推進委員会が主になり、社協Vセンターに登録している団体の代表に呼びかけを行う
7/10 (水)	地域の小学校(3校)の家庭にアンケートを実施	窓口は学校にお願いする
7/31 (水)	第2回子育てを考える会を実施 (1)アンケートを見て感想を出し合う (2)ワーキンググループを決めて、アンケート結果を表やグラフにまとめることにする	
8/30 (金)	第3回子育てを考える会を実施 <アンケート結果の考察> ・休日は家で遊ぶ子どもが多い ・土曜日に休みの保護者は少ない ・子育ては家庭だけで十分。地域の支援に期待しない保護者もいる ・ふれあいの場や遊びの場がほしい	推進委員会の見直しと、どんな取り組みが可能か次回までの宿題とする
9/25 (水)	第1回児童・青少年を支援する会の実施 <新たなメンバーが加わり、事業の概要と今後の進め方について検討> (1)第4土曜日に子どもたちが集える場を作ること 当日の担当は、会のメンバーが輪番制で (2)講演会で子どもに向き合うことを学んでいく (3)メンバーそれぞれがロコミで広報を	事業のネーミングと具体的な活動内容は宿題
10/3 (水)	海南中学校PTAと講演会を共催	保・幼・小学校の保護者にも呼びかける(120名参加)
10/25 (金)	第2回児童・青少年を支援する会の実施 (1)名前は「びっくり箱」に決定 (2)具体的な活動内容を検討	・子どもたちへの呼びかけ文は、学校に配布協力を依頼 ・中・高校生へボランティアの呼びかけ
11/14 (木)	海南町の教育を考える会へ参加	小・中・高校の校長先生、PTA会長、教育委員に「びっくり箱」の取り組みを説明
11/15 (金)	ワーキンググループのメンバーによって具体化へ	
11/23 (土)	第1回びっくり箱を実施 活動内容: ・お手玉づくり・こまづくり ・お手玉・こま回しの達人が模範演技を披露 ・参加者全員にアンケート(書けない人にはインタビュー)	担当:Vグループ「レインボー」 参加者: 子ども...32名 達人...8名 保護者...12名 ボランティア20名
11/29 (金)	第3回児童・青少年を支援する会の実施 第1回「びっくり箱」の反省と、次回に向けた話し合い	

事業を通してのポイント

住民参加ボランティア活動推進委員会が関心度の高いVグループに呼びかけて取り組んだことで、Vグループの組織化ができ、地域をあげての広がりにつながった。

事業に先立ち、アンケート調査を行ったことで、子どもたちの家庭での様子や、保護者の子育てに対する考え・状況を把握でき、地域の実情や課題が明確になり、地域資源の協働体制の強化につながった。

様々な方面からの協力支援により、子どもたちに多様なメニューを提供することができた。

ともに生きる心豊かなまちづくりをめざして

長野県・辰野町社会福祉協議会 辰野町ボランティアセンター

Vセンター事業の経緯

約2万3,000人が暮らす森林と清流に囲まれた自然豊かな辰野町に、Vセンターが開所したのは昭和63年のこと。社協事務所の一角で活動を進める中、利用者から「気軽に立ち寄れるVセンター」の要望を受け、平成10年に念願の拠点を得た。これを契機に、福祉だけでなく、地域の様々なV活動・市民活動を支援する「総合的なVセンター」へと生まれ変わった。

さらに平成11年には、独立の拠点を得たことで、ボランティアやリーダー層を育成する講座の実施をはじめ、地域でのネットワーク化や少人数の職員をサポートするための体制づくりを含めた、Vセンター機能の充実を図るための事業も展開。こうして「ともに生きる心豊かなまちづくり」に向けた、実践的な取り組みがスタートした。

豊かなまちづくりの第一歩は、まず「人づくり」から

同Vセンターでは「心豊かなまちづくり」と併せて、「人づくり」「心づくり」「関係づくり」をVセンターの大きな目標として捉えているが、まずは住民一人ひとりの意識を変えていくことが必要と、多様な人材育成講座を実施してきた。

平成13年に開催した「生き生き活動実践塾」(以下、実践塾)もその一つだが、これまでの養成講座が課題別に行われてきたのに対し、受講者自らが課題を発見し、主体的な活動へとつながっていく講座となっている。

実践塾に集まった受講生は約70名。それぞれが課題を出し合う中で、仲間づくりをし、「地域の助け合い」や「子育て」「バリアフリー」「里山環境づくり」インターネットを使っての情報発信を「など多彩な分野のテーマに分かれ、ワーキンググループが誕生した。また、グループ立ち上げに際して、広く地域の中に協働



実践に向けての企画書づくり(実践塾)

の呼びかけを展開したことで、現在6グループ310人余が生き生きと活動し、住民が主体的にまちづくりに参加する機運が生まれている。

実践塾でのコーディネートのポイント

受講者が発見した地域課題を、自分自身の問題として捉えられるよう時間をかけて話し合う。また、個の課題(ニーズ)に対し、違いを認め合うことで共通点を見出し、仲間づくりを進めていく。グループが生まれ活動がスタートすると、次は地域の資源といかにつながっていくか。Vコーディネーターは地域内外の資源を把握し、必要に応じた情報提供をすることが大切で、そのためにも、日頃からコーディネーター自身が積極的に地域に出て、関係機関との連携を進めるための体制づくりをしておくこと。



お茶のみ会で「桜もち」づくり(憩いの場)



住民の生活全般を支援するボランティアセンターをめざしたい

辰野町社会福祉協議会 辰野町ボランティアセンター ボランティアコーディネーター 福島明美さん

地域の身近な拠点として、本Vセンターには様々な相談が寄せられてきます。その中で、個々の周辺で気軽集える「いいの場」「やすらぎの場」の必要性を感じます。

現在、町内には大きなサロンが3つありますが、小さいながらも、子どもからお年寄り、障害のある人もない人も男女問わず気軽に参加できるミニサロンづくりに向け、研究・検討中です。昨年から、知らず知らずにこうした活動に取り組んでいる町内のグループを、V情報誌等で紹介し始めました。

平成13年度に実施した「実践塾」では、若者から70代まで世代を超えた受講者が集まる中で、予想外に男性の参加が多く、「心豊かなまちづくり」への関心が地域に広く浸透しているものと実感しました。今年度は、新たな人材の養成はもちろん、「ミニサロンの立ち上げ」と、V・市民活動グループの「拠点づくり」を意識したコーディネートを考えています。

辰野町では現在、多様な分野に及ぶ115のV・市民活動団体が活動を行っていますが、私たちVコーディネーターは常に地域の情報に対して「アンテナ」を張り巡らし、「個」の活動から「面」の活動へつなげていくことが求められます。そのためにも、住民の生活全般を支援するのがVセンターの機能であるという視点に立ち、どんなニーズにも一緒に考え、お互いの共通点を見出しながら「協働」へと結びつけていければと思います。

ボランティアセンターは「夢」を与える場

ボランティアセンターがボランティア・市民活動センターへ生まれ変わるためには、社協職員やボランティアコーディネーターはどのような心構えをし、どのような支援を心がけていく必要があるのでしょうか。

上野谷加代子 桃山学院大学社会学部教授(大阪府ボランティア・市民活動センター運営委員長)にお話を伺い、市民活動センターに向けてのポイントと、前ページで紹介した2つの事例の評価についてまとめました。

市民活動センターへ向けての3つのポイント

1 「Vセンターは夢を与える場」。あらためて原点を確認する

Vセンターの業務とは、V活動への参加意欲を引き出す・高める・活かし合うことで、活動者の自己実現を支援すること、市民が抱える課題を解決することであり、この2つの支援を社会の場で、信頼関係と約束(ルール)に基づいて行うものである。

しかし、例えば「豊かなまちづくり」に見られるように、V個人や単独のVグループだけでは解決できない課題へと社会状況が変化する中で、もはやこれまでの「需給調整型」のVセンター機能では対応できなくなりつつある。

一方、阪神・淡路大震災時に駆けつけたボランティアの姿を通して、被災地の方々をはじめ全国の人々が勇気づけられたように、V・市民活動の本質とは当事者や活動者だけでなく、市民一人ひとりに「勇気」を与え、それが地域に生きることへの「安心感」や「夢」につながる可能性を秘めていることである。

Vセンターの役割とはまさに、魅力ある・活力ある活動事例(物語)を住民(観客)に見せる場であることを、Vセンター職員やVコーディネーターは、あらためて認識しておくことが大切である。

2 Vセンター機能を活かして、協働の仕組みづくりを進める

それぞれの地域の中では、様々な人々が個人やグループで多様なV・市民活動を展開しているが、実は多くの活動者から交流やネットワークを望む声が、寄せられ始めている。

こうした市民のニーズに応え、より多面的な課題解決に向けた取り組みが求められる中、Vセンターは全国市区町村のネットワークと公共的立場を活かして、「協働の仕組みづくり」を進め、重層的なコーディネートを行っていくことが必要である。

3 市民活動センターの第一歩は「一緒に考える」

そもそも「福祉」とは、市民一人ひとりが幸せや喜びを感じられるように、住民の様々な生活課題の改善に取り組むことである。したがってVセンターは、多様な分野の人々と重層的に支え合うという観点に立ち、民間団体や住民の主体性を活かしながら、多彩な取り組みへの支援が求められる。

そのためにもVセンターは、住民にとって気軽に・身近に立ち寄れる存在として間口を広げていくことが大切で、どのような分野からのニーズであっても、「一緒に考える」という姿勢が必要である。



海南町も辰野町も、元気や勇気をくれる取り組みです

桃山学院大学社会学部教授 上野谷加代子さん

海南町・辰野町に共通しているのが、「日常生活で起こっている事柄」を取り上げていること。また、「びっくり箱」では子どもたちの喜びを、「実践塾」では住民の想いをそれぞれ活動につなげるという「物語」があります。このように、まちづくりを地域の中で広げていくためには、人々の心を捉える物語があるかどうか非常に重要で、実は地域住民の身近な日常生活の中にこそこうした物語が潜んでいるのです。

次に「課題の明確化と共有」が挙げられますが、海南町の場合は、座談会やアンケートを実施することを通して、辰野町の場合は受講者自らが課題を発見する手法をとるなど、そのプロセスに丁寧な工夫が見られます。一方で、この作業はとも手間がかかるものですが、どちらも「ボランティアが主体性を発揮する」ための支援に徹していて、地域の皆さんがこの意気を感じて参加している様子が想像されます。

個人にしる団体にしる、それぞれが想いをもってV活動や市民活動を行っています。まちづくりでは、「協働」の取り組みが不可欠ですが、そのためには、個々の役割や価値を地域に出し、地域社会で認知し直したうえで自らの役割を担うという作業を繰り返すことが必要です。その意味で、2つの事例が広がりを持ち得たというのは、この作業が充分に行われていたからだと思います。

そして何より、地域の皆さんに「元気」や「勇気」を与えている取り組みであること。また、Vセンター職員はじめ活動者自らが楽しんで活動を行っていることが素晴らしい。今後、夢や元気を求めて多くの市民が地域に出てくる中で、Vセンターが「市民活動センター」と生まれ変わり、市民にとって新たな可能性の場となっていくことを期待しています。